

# 復刻本たち 図書館で生きる 河原功

## 消失していった台湾資料

日本統治期台湾での新聞や雑誌の発行は「台湾新聞紙令」で、書籍やパンフレットなどの出版は「台湾出版規則」で、日本内地よりも厳しく統制されていた。それでも、台湾領有50年間には数多くの新聞・雑誌・図書が発行・出版された。

だが、戦時下の空襲被害もあって、それらの損失は少なくなかった。さらに、敗戦と同時に、台湾総督府の各部署や附属官署がまとめた内部資料の中には、隠滅を図る必要から極秘裏に焼却されてしまったものもある。そして、政権が中華民国に移管すると、日本語排斥、政治弾圧、社会混乱、自然災害などで、またもや貴重な資料が次々と消失していった。このように、台湾資料／史料は数々の災禍に遭ってきたわけだが、戦後長いこと台湾でも日本でも台湾研究が途絶えたことも、台湾資料にとっては不幸なことだった。

## 台湾資料探索の苦渋

資料なしでは台湾研究は進まない。1980年代初めまでの台湾研究は、資料探しで多くの時間と労力を要した。

台湾資料を所蔵する図書館は、総督府図書館を継承した台湾省立中央図書館台湾分館(現在は国立台湾図書館)か、台湾大学(旧台北帝国大学)図書館が最大の拠り所だった。しかし、台湾に行くには、パスポートの所持はもちろんのこと、ビザの取得、天然痘接種証明書(イエローブック)の携行、外貨の持ち出し制限、高額な航空運賃という時代がしばらく続き、そう簡単に渡航できたわけではなかった。

日本国内で台湾資料を探すにも、どこに行けば目的の資料に出会えるのかわからない時代だった。各所の図書館をめくり、図書カードを1枚1枚めくって探していくしかなかった。根気

のいる作業の連続で、成果があればよいが、徒労に終わることもしばしばだった。

## 復刻版が出版されるまで

そういう時代に、1970年代に『台湾青年』『台湾』『台湾民報』『台湾新民報』(東方文化書局)、『台湾新文学叢刊』(同)、台湾総督府警務局の秘文書『台湾総督府警察沿革誌』(風林書房)が復刻されたことは台湾研究にとって、大きな弾みとなった。

それでも、参考になる台湾資料は圧倒的に不足していた。そこで、私は、台湾資料の不足をできるだけ解消したい、台湾研究の裾野を広げたいと思い、研究のかたわら復刻にも力を注ぐことに努めてきた。研究者や関心者が公平に享受できる環境づくりが心掛けてきた。

復刻は、単に書籍や雑誌を集めてくればよいというものでもなく、著作権者の同意、所蔵者や所蔵機関との交渉、欠号や欠ページの補填、目次や索引の作成、どの出版社に復刻を持ちかけるか、誰に解題などをお願いするかなど、クリアすべき項目がいくつもある。それらをクリアして初めて、復刻版は出版される。原本が見つからず、あるいは原本提供に依じてもらえず、欠号や欠ページを残したまま復刻することも珍しいことではない。それでも、こうして復刻された台湾資料は新しい生命をえたことになる。

復刻版は概して少数数の発行のため、高価格で、個人が購入するには負担が大きい。だが、大学図書館や公共図書館が購入することで、閲覧個所が増え、原本だと許可されないコピー制限も緩和される。

## 手がけた復刻の一例

私がかかわった復刻版は、総督府警務局編『霧社事件誌』(部外秘)(社会思想社、1981年)に始まり、現在まで30種ほどになる。ひとりの力で復刻できたものもあるが、大半は多くの協力者や図書館の理解などがあって初めて復刻できたものだった。一例を挙げるのと次のようになる。

## 『台湾引揚・留用記録』

『台湾引揚・留用記録』全10巻(ゆまに書房、1997～1998年)は、台湾からの邦人30万人の引揚げに関する資料としては第1級である。台湾省行政長官公署日僑管理委員会服務員の速水国彦が、台湾総督府残務整理事務所(内務省管轄下)宛に作成した『留台日僑報告書』である。邦人の引揚げを支えた沖縄籍民の貢献、戦後台湾の復興のために留用された留用者7000人(家族を含めると2万8000人)の動向、ハンセン病患者や孤児らの送還など、台湾史の空白を理解するに欠かせない資料である。報告書は外務省大臣官房文書課にも送付されたが、ここにも現存していない。幸いにして、カーボン紙での3枚目の写しを台湾協会が所蔵していたおかげで復刻することができた。しかし、資料はバラバラに解体されていたため、元の状態にまで復元するに半年近くを要した。

関連する復刻版に『資料集 終戦直後の台湾』全3巻(不二出版、2015年)もある。総督官房秘書官だった齋藤茂が収集・記録した、終戦直後の混乱期における台湾の様子を知ることのできる資料として、こちらも貴重である。

## 『民俗台湾』

池田敏雄編集による『民俗台湾』(東都書籍台北支店)は、過去に台湾で2種、日本で1種がすでに復刻された。だが、台湾



版は裏表紙に自社の出版広告と差し替えてあり、日本版は表紙の色調を大きく誤っており、いずれも不完全だった。原本を忠実に再現した『民俗台湾』を復刻したいという願いを池田鳳姿さん(池田敏雄氏の妻)が聞き届けてくださり、解題を鳳姿さんに、総目次を長友麻奈さんに書いていただき、検閲で削除された池田敏雄「有公の靈験」と、発行されずにグラで残った最終号の提供も受け、完全版の『民俗台湾』全8巻(南天書局、1998年)を復刻することができた。印刷は原本に限りなく近づけて、製本も当時と同じ糸かがりて仕上げてもらった。

#### 『台湾出版警察報』

『台湾出版警察報』は台湾総督府警務局保安課図書掛が内部資料として印刷したガリ版刷りの月間報告書である。台湾大学の総図書館に第6号(1930年1月)～第35号(1932年6月)が所蔵されていて、表紙には大きく「秘」のゴム印が押され、配布先を示す通し番号「第32号」が記されている。この『台湾出版警察報』をほかで見ることができないのは、敗戦と同時に焼却されたためだと言える。不完全だが、当時は台湾社会運動の全盛期にあっていたため、検閲の生々しい実態を窺い知ることができる唯一の貴重な資料である。所蔵する台湾大学図書館との煩雑な交渉では呉密察教授にお世話になった。2001年に不二出版から全5巻で復刻した。

#### 『翔風』

台北高等学校校友会誌『翔風』は台湾教育史、旧制高校研究に欠かせない。教員では下村虎六郎(湖人)、林原耕三、島田謹二など、生徒では中村地平、濱田隼雄、鹿野忠雄、王育徳、邱永漢、辜振甫などが作品を寄せ、表紙の多くは塩月桃甫(国画家)が描いている。『翔風』は台北高等学校創立90周年記念

行事の一環として南天書局から2012年に復刻したが、創刊号は欠号になっていた。「出来が悪い」ということで、三澤糾校長によって没にされたためである。ところが、その後に幻の創刊号が発見できたため、本年の創立百周年記念を機に復刻、これで『翔風』全26号が完全にそろった。先に復刻した台北高等学校新聞部『台高』とともに、台北高校生の息吹を強く感じることができる。

#### 台湾文学資料

復刻版でもっとも多く出版したのは、台湾文学の作品だった。中島利郎・下村作次郎両氏と共同で、1998年～2007年にかけて緑蔭書房から『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集』全6巻、『同 台湾人作家作品集』全6巻、『同 文芸評論集』全5巻、『日本統治期台湾文学集成』全30巻を出版した。また、藤井省三・垂水千恵・野間信幸・星宏修・岡林稔の各氏にも協力を仰ぎ、2000年～2001年にゆまに書房から『日本植民地文学精選集 台湾編』全14巻も出版した。これによって、日本統治期に発表された台湾文学の主要作品のほとんどが復刻版で読めるようになった。

#### 復刻にかかったそのほかの台湾資料

ほかにも、監修／編集／解題執筆した台湾資料、資料提供などで出版協力した台湾資料もあり、それぞれに復刻にいたるまでの物語がある。

台湾新民報社／興南新聞社『台湾人士鑑』全3巻(湘南堂書店、1986年)  
台湾経世新報社『台湾大年表』／台湾総督府『台湾日誌』(緑

蔭書房、1992年)  
台湾新報社『旬刊台新』全2巻(緑蔭書房、1999年)  
風月倶楽部『風月・風月報・南方・南方詩集』全10巻(南天書局、2001年)  
皇民奉公会中央本部『新建設』全4巻(総和社、2005年)  
台湾総督府『台湾総督府第六十回帝国議説説明資料』全5巻(不二出版、2018年)  
台北高等学校同窓会誌『蕉葉会報』全4巻(不二出版、2022年)  
台湾大衆時報社『台湾大衆時報』『新台湾大衆時報』(南天書局、1995年)  
台湾日日新報社『台湾六法』(緑蔭書房、1999年)  
台湾総督府『公学校用国語読本』全60冊(南天書局、2003年)  
『近代台湾都市案内集成』全20巻(ゆまに書房、2013～2015年)  
愛国婦人会台湾本部『台湾愛国婦人』全83冊(三人社、2019年～)など

私が復刻にかかった台湾資料はこのようにほんの一部に過ぎないが、復刻の世界には、『朝日新聞外地板 台湾版』(ゆまに書房、2015年～)、『毎日新聞外地板 台湾版』(同、2015年～)、『戦前期台湾火災保険特殊地図集成』(柏蔭書房、2018年)など、素晴らしい台湾資料がたくさんある。復刻で新しい生命を授かった台湾資料の多くは図書館に収められ、それによって研究者や関心者が比較的容易に閲覧できることはありがたいことだ。

現代はデジタル社会でペーパーレス化が進んでいるが、復刻を求められている台湾資料がある限り、紙資料としての復刻はまだまだ続く。



河原 功 かはらは・いさお  
一般財団法人台湾協会参与

高校教諭のかたから、大学非常勤講師として「台湾の文学と文化」を担当してきた。現在は台湾協会図書館資料室主任を務める。50年以上にわたって、日本統治期台湾の文学を中心に、台湾史、台湾教育史、台湾での書籍の流通と検閲、邦人引揚史などを研究。一方、台湾関係の図書や雑誌の復刻を多く手がけ、台湾研究の基盤整備に努めてきた。台湾関係資料の収集にあたっては、日本国内はもとより、台湾各地をめぐる。1969年に初めて訪台したときには原住民族に関心があったが、台湾文学を卒論で扱うことからは、資料収集目的で頻りに訪台、その回数は80回近くに及んだ。観光はあと回しで、もっぱら図書館での資料コピー、書店や古書店をめぐる資料の購入が主であった。また、楊逵、王詩琅、吳濁流、張文環、葉榮鐘、洪炎秋、王昶輝などの文学関係者とのコミュニケーションを図ることも努めてきた。

#### 主な著書

- ・『台湾新文学運動の展開——日本文学との接点』研文出版、1997年
- ・『翻弄された台湾文学——検閲と抵抗の系譜』研文出版、2009年

### 貴重な復刻本を閲覧するには？

一般財団法人台湾協会には、台湾関係の重要な図書・資料(約6千冊)を所蔵する図書室が整備されている。復刻本も多く所蔵し、会員及び一般研究者による閲覧が可能。

	<b>一般財団法人台湾協会 図書室</b>
	開室時間：月曜～金曜日 午前10時～11時 午後13時～16時30分 (事前予約制)
	休室日：土・日・祝祭日
	〒113-0034 東京都文京区湯島2丁目31番15号 和光湯島ビル6F TEL：03-5615-9380





日本で台湾書籍の原書に出会いたいなら

## 台湾書店の香りと雰囲気満喫できる、 Books Kinokuniya Tokyo 洋書専門店へ。

日本で台湾の書店気分が満喫できる恐らく唯一の場所が、新宿のど真ん中にある、紀伊國屋書店洋書専門店「Books Kinokuniya Tokyo」(以下、BKT)だ。

BKTは、2014年に誕生した日本最大規模の洋書空間とあって、フロア面積は300坪、書籍数は12万冊。現在、英仏独伊西越中台韓の輸入書籍と洋雑誌を購入することができる。「Taiwanese books」と表示された台湾書籍販売常設コーナーは、2020年8月に設けられた。ここでは、日本の小説や漫画の繁体字中国語翻訳本をはじめ、台湾の小説、ノンフィクション、ライトノベル、コミック、絵本・児童書、グルメ、育児、健康、読みやすそうな政治、経済関係の本など常時2000点、3000冊の台湾書籍が並べられている。台湾の本と香りまでもがそのまま輸入された、正にリアル台湾書店なのだ。

では、台湾書籍販売常設コーナーはどうやって生まれたのだろうか。

SNET台湾代表理事の赤松美和子が、「Taiwanese books」コーナー創設時のBKT店長で、現在は洋書店売部部長の舟木幹男氏に話を聞いた。

### 舟木幹男 ふなき・みきお

紀伊國屋書店 洋書店売部部長

2020年8月、念願かなって洋書専門店 Books Kinokuniya Tokyoでの台湾書籍の常設販売にたどり着き、現在は「書く」「聞く」「話す」はできないものの、「読む」だけはある程度できるという本屋的語学力で台湾書の選書を担当。最近台湾語を少し習り、台湾華語とは発音だけでなく文法まで違うことに驚いてしまい、ぜひとも台湾に行って MRTの台湾華語・台湾語・客家語・英語の4言語車内放送をじっくり聞いてみたいと夢見ています。



## Books Kinokuniya Tokyo 洋書専門店

営業時間：11:00～19:00  
TEL：03-5361-3316（代表）

〒151-0051  
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-24-2  
タカシマヤタイムズスクエア南館6F

**赤松** BKTの「Taiwanese books」コーナー設置の経緯について教えてください。

**舟木** 20年ほど前にアメリカのシアトル店に店長として赴任しました。シアトル店はチャイナタウンの真ん中にあり、台湾人のお客さんも多く、細々と台湾書も売っていました。台湾人スタッフとも協力して台湾書の取り扱いを増やしたところ、売上も劇的に増えたんです。ほかの州から台湾書目当てに毎月通われるお客さんもいっしょに、「アメリカでいちばんいい中文書店だ!」という声をいただいたこともあります。海外で自分の国の本に出会えるというのは、特別なことです。台湾書がアメリカ在住の台湾人の方々の心の支えとなっていることを痛感しました。

**赤松** それがきっかけになったんですね。舟木さんご自身も台湾がお好きなんですか？台湾に行かれたことは？

**舟木** 私が台湾<sup>びんぎ</sup>真ん中になったのはたぶん、台湾の絵本作家・幾米さんの大人絵本に魅了されたのがきっかけだったと思います。じつは台湾には1回しか行ったことがありません。シアトルから日本に帰国後、紀伊國屋書店は台湾に出店しているという縁もあり、日本



にも多く台湾の方がいらっしゃいますし、心の拠り所をつくりたいと、台湾書籍販売常設の必要性を痛感したのです。2005年には台湾にもおもむき、その可能性を探りました。

**赤松** 2005年という、いまから17年前のことですね。

**舟木** はい。ただ、当時はBKTの書籍はアルファベットで管理していましたので、そういったシステム上の問題があり、すぐに台湾書籍を販売するには管理上難しく、また市場についても予測が立たなかったため、実現にはいたりませんでした。

**赤松** なぜ2020年になって実現できたのでしょうか。

**舟木** 紀伊國屋書店は2018年にベトナムのFAHASA、韓国の教保文庫と提携を結びました。ベトナム書、韓国書の取り扱いも始め、お客さんも来てくださるようになりました。そこで、日本の店舗でアジア系の言語を扱うことへの可能性を感じたんです。紀伊國屋書店のグローバル化の一環としても、15年以上前から何度も提案してきた台湾書籍販売の可能性を、再度探り始めました。その結果、従来のシステムを使いながらも、台湾書籍の売上集計を管理できるシステムを構築することができない、台湾書籍も取り扱えることになりました。3.11のあと、台湾から多額の義援金をいただき、日本での台湾への関心が高まり台湾ファンが増えたことも、機運の高まりにつながっていったのだ

と思います。

**赤松** 販売書籍は、どのような基準で選定していらっしゃいますか？

**舟木** 最初は台湾の紀伊國屋書店がある程度の形をつくってくれました。いまも選書資料は毎日届きますが、スペースに限りもありますし、新刊の中で売れた分野の本を補充して行っています。そのほかには、育児や健康に関する本も常備しています。絵本が多いのは、シアトルでの経験にもとづきます。「自分の子どもに台湾の絵本を読ませたい」と大量に絵本を買っていかれるお客さまもいらっしゃいます。そういったお客さまに出会えたときは、台湾書籍の販売を始めてよかったという思いになりますね。日本で暮らす台湾の方々への心の支えになれば嬉しく思います。もちろん台湾の方ばかりではなく、日本の方も台湾の本を買いにいらっしゃいます。最近では、BLも人気です。



**赤松** Books Kinokuniya Tokyoと日本の台湾本を扱うほかの本屋さんとの違いを教えてください。

**舟木** 専門書というよりも、一般の方々にお読みいただけるような本を中心に扱っていることが大きな特徴だと思います。1カ月、2カ月前に流行った本もできる限りそろえ、日本にいる台湾の方々にぜひ手に取っていただきたいと思っています。



赤松美和子 あかまつ・みわこ  
大妻女子大学比較文化学部教授

SNET台湾（日本台湾教育支援研究者ネットワーク）代表理事。お茶の水女子大学賞第6回小泉郁子賞受賞（2022年）。専門分野は、台湾文学、台湾映画、比較文化、表象文化。大学時代は交響楽団に所属し全日本大学オーケストラ大会で大賞を受賞した。音楽鑑賞、映画鑑賞、料理、旅行、水泳、キックボクシングが趣味。台湾滞在中は、貧乏株主として台湾株にはまった。台湾に行くこと、誠品書店・南天書局・女書店・楽学書局・聯経書房・唐山書店・紀伊國屋書店など本屋さんをめぐるのが楽しみ。台湾の本の香りが好きなので、台湾本が香る空間を求めて、BKT洋書専門店台湾書籍販売常設コーナーに通っている。

### 主な著書

- 『台湾を知るための72章』共編、明石書店、2022年
- 『台湾文学と文学キャンプ』東方書店、2012年

## 台湾文化センターのご案内

台湾文化センターは、台日文化交流のプラットフォームとして、台湾の芸術や文化に関連するさまざまな情報を広く紹介しています。台湾の文化産業の発展や、日本マーケットへの進出・拡大を促進するために、台日両国の芸術・文化関係の各団体と協力し、企画展、イベント、情報提供など、多種多様な推進活動を行なっています。

東京虎ノ門にある台湾文化センターでは、台湾文化の発信基地として、ギャラリー、図書室、イベントスペースを完備しており、これまで台湾アニメ、漫画、文学、アートを紹介する企画展や映画上映会、トークイベント、文化体験講座など、さまざまな切り口から台湾文化を肌で感じられる文化交流の場を提供しています。来館者のどなたでも自由にご利用いただける図書室は、数多くの台湾関連書籍を収蔵しており、一度訪れば多角的な視点から台湾を見つめることができます。ぜひ、当センターで最新の台湾カルチャーに触れ、台湾思索にふけてください。



### 台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

開館時間：10:00～17:00(月曜日～金曜日)

※土、日曜と祝祭日はイベント開催時のみ開館いたします。

TEL：03-6206-6180

〒105-0001  
東京都港区虎ノ門1-1-12 虎ノ門ビル2F



## SNET 台湾とは？

2018年9月に発足したSNET台湾(NPO法人日本台湾教育支援研究者ネットワーク)は、台湾について知りたいすべての人と台湾を専門とする研究者をつなぐプラットフォームです。台湾研究の成果を学びのコンテンツに変えて広く社会に発信し、日台間の相互理解の深化に寄与するを目的として設立されました。未来に続く真の友好は確かな相互理解の土台の上に築かれると、私たちは考えています。SNET台湾といっしょに台湾の新たな魅力を発見してみませんか？

代表理事  
赤松美和子(大妻女子大学)  
洪郁如(一橋大学)  
山崎直也(帝京大学)  
顧問  
若林正文(早稲田大学)

SNET 台湾  
<https://www.snet-taiwan.jp>



### 活動内容

- 1 台湾研究者の派遣
- 2 学習教材及び関連書籍などの作成及び編集
- 3 ワークショップ・講座・イベントなどの開催
- 4 台湾への修学旅行・研修旅行の計画設計及び助言
- 5 台湾の関係機関や研究者との連携

### SNET 台湾がプロデュースする学びのコンテンツ

みんなの台湾修学旅行ナビ  
<https://taiwan-shugakuryoko.jp>



みんなの台湾修学旅行ナビは、台湾各地のスポットを台湾研究者がわかりやすく、そして少し深く紹介する情報サイトです。“みんな”修学旅行なので、中学生に限らず、子どもから大人まで台湾に行きたい、知りたいすべての人に向けた内容となっています。各スポットの紹介は、①概要、②学びのポイント、③さらに学びを深めるための事前・事後学習及び現地学習のアイデア、④参考資料によって構成され、研究者ならではの深く鋭い視点から台湾の歴史といまを知るためのさまざまなヒントがえられます。また、スポット紹介に加え、半日・1日から4泊5日まで、テーマに即したモデルコースも提案されているので、あなただけの台湾を学ぶ旅のデザインに役立ちます。

おうちで楽しもう台湾の博物館  
<https://taiwan-shugakuryoko.jp>



「おうちで楽しもう台湾の博物館」は、台湾を代表する10の博物館(国立台湾博物館・国立故宫博物院・国家人權博物館・国立中正紀念堂・国立台湾史前文化博物館・国立台湾文学館・二二八國家紀念館・順益台灣原住民博物館・衛武宮國家藝術文化センター・国立台湾歴史博物館)が制作した魅力的な動画に解説と日本語字幕をつけて紹介するシリーズです。10の博物館が描き出す台湾像はそれぞれの彩りで、多様性に満ちた台湾文化の世界にみなさんを誘います。

私たちのくらしと人権  
<https://snet-taiwan.jp/twhr/>



SNET台湾が台湾国家人權博物館、台北駐日経済文化代表処台湾文化センターと共同で開催した特別展「私たちのくらしと人権」(2021.9.15～11.30)の開催を機に制作された本サイトでは、国家が人々の人権を抑圧した白色テロ期(1949～92年)を乗り越えて台湾が「人權擁護の先進国」に生まれ変わるまでの歩みを記録した年表、特別展のガイドブック(電子版)、関連映像、人権旅行地図をご覧いただけます。また、ギャラリーのページでは、特別展の展示内容、台湾の政治犯に救いの手を差し伸べた日本の「台湾の政治犯を救う会」の活動、国家人權博物館についても紹介しています。



**臺灣書旅**  
**台湾を知るためのブックガイド**  
**A Book Guide to Taiwan**

---

発行：台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター  
企画・制作：株式会社紀伊國屋書店  
統括・企画・編集：NPO 法人日本台湾教育支援研究者ネットワーク (SNET 台湾)  
編集：増田謙治  
アートディレクション：株式会社100KG  
書籍撮影：遠藤正太 (VENDO)  
校正・校閲：株式会社嗣来堂  
印刷：株式会社シナノバプリッシングプレス

---

©台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター  
禁断転載

当ブックガイドで紹介している書籍の中には、出版社品切れなどの理由により、  
現在書店では入手困難になっている書籍も含まれています。  
あらかじめご了承の上、図書館利用などの参考資料としてご利用下さい。  
なお、記載の価格は2022年7月時点での消費税10%を含む価格です。



